

草の根市民による沖縄のジュゴン保護活動の構築

北限のジュゴンを見守る会代表 鈴木 雅子

2011年度高木仁三郎市民科学基金(高木基金)から「北限のジュゴンを見守る会」に20万円の助成金が支給されました。それは「北限のジュゴン調査チーム・ザン」の活動のために使われ、その成果報告が2012年6月10日、南部労政会館(東京)で開催された高木基金成果発表会で鈴木雅子さんによってなされました。報告の主要部分を掲載します。(編集部)

【調査研究・研修の概要】

世界の北限に生息する沖縄のジュゴンは絶滅の危機に瀕しているが、その最も重要な生息地は米軍新基地建設の脅威にさらされ、国は有効な保護策を打ち出していない。

そのような状況の中、私たちは地域市民を主体とした、ジュゴンの生息環境のモニタリング調査を2006年以来続けている。ジュゴンの生息地への米海兵隊新基地建設は政治的な理由で辛うじてペンディング状態になっているが、その陰で進行する緊急の課題は、昨今の「防災」の名によるジュゴンの生息域への脅威である。

沖縄県の「日本復帰」(1972年)以後の沖縄島の自然環境の劣化は甚だしく、比較的自然が残っていると言われる「やんばる」(沖縄島北部のこと)においても、ジュゴンが生息可能な自然海岸はほとんど残されていない。それゆえこれまでに絶滅した生物の「種」は数えきれないが、その現実を顧みることなく続けられている土木行政中心の「防災対策」においては、今も日常的にジュゴンが利用している餌場での護岸計画が進行している。

今年度の前期は、台風の来襲も多発し、食(は)み跡調査の中止が相次ぎ、予定されていたデータ収集が困難だったので、地元住民および自治体に対しジュゴン保護の必要性の周知徹底を図ることや、危険がともなう海の調査に備えて、調査員の安全対策と訓練に力を注いだ。後期は、天候にも恵まれて広範囲なデータの収集ができた。調査メンバーも多方面の分野から

集まるようになり、陸上の補佐チームやカヌーチームによる安全確保も万全となった。

また、防災と水環境システムの専門家を交えた総合的な環境保全をテーマにした学習会を開催するなど、市民と行政に生活に密着した自然環境の保全を訴えている。

現在は、陸上の水循環や集落の水資源管理を含めて、ジュゴンの生息環境を総合的に解明する調査にも着手し、防災工事の中に沿岸環境の保全をしっかりと位置づけるべく、研究者と連携しつつ、沖縄県行政と地元住民との合意を目標に、自然海岸の保全を主眼とする新たな護岸設計の提案などにアプローチしている。



ジュゴン食性調査

【調査研究・研修の経過】

2011年

- ・ 4月 : 海藻研究所所長・新井章吾氏を迎えて懇談会
- ・ 5月 : 環境省那覇自然環境事務所の奥田直久所長を迎えて懇談会
: 「沖縄21世紀ビジョン基本計画」県民意見募集にチーム意見提出
- ・ 6月 : 沖縄県土木建築部北部土木事務所との意見交換会
: 大浦湾のトレンチ確認、撮影
: 辺野古違法アセス訴訟弁護団視察に対応
: 「人と自然のふれあい調査」講習会in大浦（主催：日本自然保護協会）に参加
: 緊急学習会「米軍再編と辺野古移設問題」（主催：ヘリ基地反対協議会）に参加
- ・ 7月 : ジュゴン・ワークショップ開催（30名参加）
: 沖縄県森林整備保全課、および北部土木事務所へ要請行動
: 名護市行政との「ジュゴン保護」に関する意見交換会
- ・ 8月 : 小島望准教授（川口短期大学、保全生態学・ダイバー）を迎え食み跡観察
: 辺野古違法アセス訴訟弁護団による裁判官の視察リハーサル
- ・ 10月 : フォーラム「地域を知るコツ！～生物多様性地域戦略につながる第一歩～」（主催：日本自然保護協会）参加
: 海藻研究所所長・新井章吾氏、北部海岸の巡見
: 北部海岸の巡見の結果を踏まえ、北部土木事務所と護岸建設計画の情報交換会
: 辺野古違法アセス訴訟現地進行協議への対応
: ジュゴン懇談会にてチーム調査活動の紹介（主催：国立公園協会）
- ・ 11月 : 食み跡初心者講習（2日間）
: 食み跡広域調査実施（4日間）
: みらいファンド沖縄によるCSR（企業の社会的貢献）番組、台風FMに出演
- ・ 12月 : 北部土木事務所へ新井章吾氏の浸透システムのレクチャー
: 名護博物館にて市民講座「水はめぐり命をはぐくむ」開催

2012年

- ・ 1月 : 辺野古違法アセス訴訟裁判傍聴
: 第10回沖縄県環境影響評価審査会傍聴
: 食み跡撮影と湧水調査
: アセス評価書のチーム意見を提出
: 第2回アセス審査会傍聴
: 第3回アセス審査会傍聴
: 北部土木事務所へ湧水調査進言
- ・ 2月 : アセス評価書についての知事へのチーム意見提出
: 国頭村楚洲地先にて、ジュゴン2頭目撃情報（「海想」森）
: イベント「嘉陽の海岸の生き物を見てみよう！」共催
: セミナー「海をまもる方法～海洋保護区について考えてみよう」参加
: 嘉陽海岸住民参加型エコ・コースト推進協議会傍聴
: 嘉陽湧水調査
- ・ 3月 : 嘉陽海岸住民参加型エコ・コースト事業 住民説明会参加
: セミナー「自主ルールを用いて自然をまもる方法」共催
: 日本自然保護協会とエコ・コースト事業について県北部土木事務所と協議
: ジュゴン・フォーラム開催

【今後の展望など】

沖縄の基地問題によって常に脅かされるジュゴンの生存は、「ジュゴン保護区の設定」というスローガンを叫ぶだけで解決する問題ではない。ともすれば「保護区運動」や「世界自然遺産登録」が沖縄の自然保護運動の象徴のように受け取られるが、そこには地元住民自身の環境保全という視点が欠落している。沖縄県民自身が自らのよってたつべき自然や文化の価値を再認識しない限り、たとえ「保護区」や「世界遺産」に地域の一部が指定されても、それはいわゆる『観光』振興に寄与するのみであり、沖縄の自然は一方的に「本土」に消費され続けるだけで、自然環境の未来に向けた新たな展開は望めない。

すでに沖縄ジュゴンの生息数は絶滅のカウントダウンの域にある。そのような現状において、

私たちがモニタリングしている地域個体群も、米軍基地の移設問題いかにによってだけではなく、近い将来に消滅する可能性も考えられる。私たちは彼らの食み跡（生息の証拠）が続く限り、生息データを記録し、ジュゴンの生息環境の要素を明らかにしつつ、沖縄ジュゴンの歴史を記録し続ける。そして沖縄の他地域に生息するジュゴンの痕跡をも明らかにして、ジュゴンの生息できる沿岸生態系の復元に向けての研究と実践を試みる。

また、同時にジュゴンと人との関係について研究を深め、今後、名護市が策定する「生物多様性地域戦略」を含めて、市民、県民にとってのジュゴンの意味（沖縄の生物多様性）を正面から問う作業に着手する。



ジュゴン・ワークショップ
ジュゴンの海の観察会

ライントランセクト法によるジュゴンの食性調査

